

むら      なか      とも      こ  
村      中      知      子

学位の種類      博士(文学)  
学位記番号      文 第 118 号  
学位授与年月日      平成8年3月22日  
学位授与の要件      学位規則第4条第2項該当

学位論文題目      ルーマン理論の可能性

論文審査委員      (主査)

教授 佐藤      勉      教授 海野 道郎  
教授 吉原 直樹

## 論文内容の要旨

### まえがき

本研究は、現代における社会システム理論の第一人者であるN・ルーマン(Niklas Luhmann, 1927-)の理論プログラムの全体像をその方法論とからめて明らかにしようとしたものであるが、それは以下の課題意識にしたがっている。

近年、存在論的な理論のもつ隘路を脱却しようとする社会科学全般における「実体から関係へ」という動向はいやがうえにも高まりつつあるが、システム理論もそうした理論動向に位置づけられて、その有効性の総体的な検証が求められている。ルーマンは、現代社会学において、T・パースンズ以後断念されている「社会学における一般理論の再興」に意欲をもやしているのだが、新しい一般理論ともいべきメタ理論の構築を、一般システム理論を社会に準拠して特定化した「社会システム理論」に依拠しておこなおうとしている。

こうしたルーマンの試みは、社会科学の動向にそいつつも、それをはるかに超えるほどの野心的かつ斬新な内容を有している。それは、ルーマンが、従来の社会学にくわえて、ありとあらゆる諸科学の成果をもとりこんで、社会学の刷新をおこなおうとしていることに端的に現れている。ところが、ルーマンがとくに新しい位相を捉えるために導入した難解な専門用語(たとえば、複合性、複合性の縮減、ダブル・コンティンジェンシー、自己準拠、オートポイエシスなど)がこれまでの社会学の伝統を超え出る理解を要請しているためか、当の社会学においてもなかなか理解されがた

く、ルーマンの理論的な意図が誤解、あるいは曲解されてきているという事情がある。以上をふまえて、本研究は、ルーマン理論の社会学基礎理論としての有効性を、システム、自己準拠、オートポイエシスの諸概念を従来の社会学の伝統と関係づけて分析し、これら三つの概念の関係性を明示することにより、見定めようとするものであり、あわせて、社会システム理論の現代社会分析力としての可能性、および現代社会学におけるルーマン理論の正当な位置づけを探ろうとしたものである。

本研究の構成は、以下のようになっている。

ルーマン理論の可能性

序

## 第1章 社会学におけるルーマン理論

- 1 ルーマン理論の受容をめぐって
- 2 ルーマン理論——なにが問題とされるべきか——

## 第2章 システムとはなにか

- 1 複合性および複合性の縮減
- 2 システム／環境－差異
- 3 自己準拠的システム——オートポイエシスと観察
- 4 システムの閉鎖性と開放性
- 5 心理システムと社会システム
- 6 意味システム
- 7 社会学の対象となるシステム——社会システム

## 第3章 自己準拠

- 1 自己準拠理論的課題——普遍性を要求しうる理論の構築
- 2 意識の自己準拠から社会的なものの自己準拠へ
- 3 準拠と観察
- 4 基底的自己準拠
- 5 過程的自己準拠——再帰性
- 6 システムの自己準拠——再帰
- 7 自己準拠の脱トートロジー化
- 8 自己準拠の問題性

## 第4章 方法としての機能主義

- 1 機能的方法の位置づけ——因果関連を超えて
- 2 問題の定式化——構造・機能主義から等価機能主義へ
- 3 機能的方法とシステム理論
- 4 ルーマンにおける方法論的前提——三つの意味次元

## 第5章 社会システム理論——行為理論を超えて

- 1 行為からコミュニケーションへ——基礎概念の革新
- 2 社会の変動——その基礎としてのダブル・コンティンジェンシー
- 3 社会システムにおける構造——構造主義を超えて

#### 4 社会の把握——自己描写としての機能分化した社会

### 第6章 ルーマン理論の可能性

- 1 ルーマン理論のオリエンテーションの有効性
- 2 社会学に対する理論的な貢献——基礎的諸概念の精緻化とその関係づけ
- 3 ルーマン理論の残された課題

以下では、この構成にそって、内容を略述する。

第1章においては、「社会学におけるルーマン理論」と題し、まず、日本において、ルーマン理論がどのように受容されてきたかをあとづけ、これまでの紹介のされ方の問題点、および、社会学における「理論」の位置づけを明らかにし、ルーマンの問題提起の不可避免性を指摘している。ついで、ルーマン理論を読み解くうえで、メタ理論の構築、最終的には社会についての理論をつくりあげるというルーマンのそもそもの課題から、トータルにルーマン理論を問題とすべきことが述べられている。それとの関連で、本研究の構成について述べ、自己準拠という事態をいかに考慮し、理論に組み入れるのかという問題がルーマン理論のポイントをなしており、とくにキーとなる用語は、システム、自己準拠、オートポイエシスであることを指摘した。

第2章では、マツラーとバレラのオートポイエシス概念を取り込んだ、ルーマン独自のシステム概念がどのようなものであるのかが、従来のシステム概念との相違から明らかにされている。特に複合性、複合性の縮減から始めているのは、サイバネティクス的な技術論的なルーマン理解がいわばまかりとおっていること、および意味、行為、体験との関連でシステムと複合性の関係を捉えなおすことが不可欠だと考えられるからである。ルーマンのシステム概念が変化しつつも、一貫してより精緻化されていることを示すために、システム/環境-図式から自己準拠システムへのパラダイム転換の流れが、①システムの要素の産出とシステムの自己観察概念の精緻化、②オープン・システムの難点を解決したシステムの閉鎖性と開放性についての新たな理解に対応していることを中心に説明した。そのうえで、社会学の対象となるシステムが心理システムと社会システムであること、それらは同時に意味システムであることを内容的に明示した。

つづく第3章では、ルーマン理論の要となる自己準拠 (Selbstreferenz) 概念の問題性について論じた。はじめに、論理構成のなかに自己準拠概念を採り入れることの意義、すなわち、観察者の自己準拠に優位性を与えてきたこれまでの理論へのインパクトが大きいこと、それゆえ「爆薬としての自己準拠」とみなされざるをえないことを基礎にして、ルーマンの提唱する「普遍性を要求する理論」とはなにを意味するかが明らかにされている。その帰路は、観察対象の自己準拠をも理論構成に組み込み、認識結果をも当の理論によって点検することをとおして排他性要求を退けることである。

以上のことは、従来意識哲学でもっぱら取り上げられてきた意識の自己準拠から、すなわち従来主体と言われてきたものの自己準拠から社会的なものの自己準拠へと自己準拠概念を拡張することを要請する。単独のわたしだけでなく、複数のわたしのおこなう複合性の縮減は、単独のわたしに帰属しえないものであり、社会的なものとは、まさに個体還元主義を退けたところに成立するというルーマンの主張の要諦が自己準拠の分析に遺憾なく指示されていることを解明した。

ルーマンは、準拠と観察を区別し、そのことから、システムの要素の産出とシステムによる自己

観察の関係を論じ、システムのオペレーションの内実を分析しているが、このこと自体がルーマンのシステム概念を社会に適用するのを説得あるものにしてしている。ルーマンは自己準拠を基底的自己準拠、過程の自己準拠（再帰性）、システムの自己準拠（再帰）に区分し、システムにおいてその三者がいかに区別されるか、区別したうえで、それらはいかに関連しているかについて解明しているのだが、その意味内容について、平明に解説した。すなわち、基底的自己準拠とは、システムの要素の自己準拠であるのだが、システムの閉鎖性に依拠しての要素の回帰的産出を意味し、これがオートポイエシスである。心理システムと社会システムの要素は、その要素が出来事であることからして、時間に定位しており、かならず消滅する。したがって、崩壊するものからつぎなる要素が産出されることから、要素は時間化されている（複合性の時間化）。

それゆえ、オートポイエシスとは、崩壊する要素からたえずつぎなる要素が接続してゆくことを必要としており、システムの要素ではあっても、まったく同一の要素ではなく、接続性をもつ異なる要素が産出されなければならない。したがって、オートポイエシスの停止は、システムの終焉を意味する。これに対し、過程的自己準拠は、ある一定の要素が一つの統一体としての過程を形成するばあいに、準拠というオペレーションがそうした統一体に関係づけられて生じる。この端的な例が、社会システムの要素であるコミュニケーションの過程がその過程それ自体において、コミュニケーションの対象となるばあいである。過程の自己準拠、すなわち再帰性により、その過程に特徴的なメルクマールを強化することになる。再帰性は過程の選択性の強化に資している。同様に、観察過程、権力過程等でも、過程がもういちど過程としての機能をはたすことにより、自己観察のモメントが組み込まれ、いわばその過程それ自体が点検されることになる。

最後のシステムの自己準拠は、自己がシステムであるばあいであり、システム準拠と自己準拠とが重なるケースである。再帰の好例は、社会が社会について観察したり、描写したりするばあいである。

これら三つの自己準拠は、じっさいには区別されないでシステムで用いられている。これらを区別することにより、システムのオートポイエシスの生産がいかなるものであるかについての諸条件が明示化され、システムの閉鎖しつつ開放的なオペレーションが重層的に把握される途がルーマンのシステム理論によって開示されていることを解明した。

また、自己準拠はじっさいに作動しているさいには、純然たる自己準拠（自己＝自己）は脱パラドックス化されている。すなわち、当初のシステムの差異図式はその差異図式それ自体に適用されないのであるが、そうした作動を阻止するパラドックスはじっさいの作動においては隠蔽されている。ここにも、いわゆる理論における客観性問題ともからんで、システムのオペレーションがすべて逃れることのできない盲点をもっていること、そのことを前提にして、理論は対象の自己準拠のみならず科学システムの自己準拠を考慮せざるをえないことを示した。

いずれにしても、システムのじっさいの作動とその作動を研究対象とする社会学を含む社会科学は、自己準拠という問題を、理論構成としても、対象認識の上からも、もはや避けて通ることができないルーマンの自己準拠概念によって明らかにされていることを明示した。

第4章では、「方法としての機能主義」として、ルーマンの提唱する等価機能主義の意味するところを中心に解説している。ルーマンは、機能主義に対して浴びせかけられてきた批判に真っ向から応戦し、因果連関を超え出るところに機能主義の本来の利点を見つけたそうとしている。すなわ

ち、従来の因果性把握は、単一原因と単一結果とを結合させている点で、じつは存在的な現にあるものによってものごとを捉えることに呪縛されている。つまるところ、機能主義の方法としての実り豊かさは、コンティンジェントなものを見つけ出す索出的方法であり、多くの因果連関を比較考量する比較的方法であることである。また問題の定式化では、ものごとを存続から捉えるのではなく、問題として捉えること、すなわち、存在定式から問題定式への移行が構造・機能主義から等価機能主義への機能主義それじたいの変化を要請している。構造概念に先だって機能概念を位置づけること、これがその帰結である。

システム理論は、方法論としては機能主義に依拠しているのであるが、そうした方法とシステム「理論」との関係が問わなければならない。ルーマンは、機能的方法が問題の構成に依拠してその有効性を発揮するとしたうえで、そうした問題それ自体の構成を導くものをシステム理論として位置づけている。システム理論は、機能的方法からは獲得されえない問題定立や分析結果を濃縮し具体化するための要因となっているのである。科学分析は、科学システムをシステム準拠にする機能分析である。科学システムはそのシステムで通用するパースペクティブを用いて対象システムを観察し、そこから理論を産出している。だが、観察しているシステムと対象システムとでは、そのパースペクティブは異なっている。そうしたばあい、科学システムの分析の有効性はどこにあるのかが問題となる。科学システムの分析の有効性は、概念的抽象を駆使して、観察されるシステムの複合性の再生産と増大に関して、対象システムにとっては考えられない方法によって観察していることにある。そこから、科学システムは、第1に、潜在的な構造や機能、第2に、顕在的な機能や構造のそれ以外の別様の可能性、すなわち対象システムが見えていないものを問う可能性を現実化していると言えるのである。科学システムが観察対象の自己準拠を射程に取り組みるとき、科学による啓蒙、つまりは理性的啓蒙に対するルーマンのオルターナティブである「社会学的啓蒙」の主張がなされるのだが、その経緯を明示した。

また、第4章では、ルーマンがシステムを意味システムとして分析するさいに、その方法論的前提となるのは、意味の三つの次元、つまり事象的、時間的、社会的次元である。意味を否定することのできない根本概念とし、あらゆる社会的事態に意味が組み込まれているとするルーマンからすれば、意味を構成するシステムのすべて、すなわち、社会システムと心理システムは、複合性の縮減と自己準拠とを意味にもとづいておこなっている。そのさい、意味の自己準拠の脱トートロジー化のために意味の三次元の考察が不可欠であるのだが、その所以を示した。

第5章では、以上のことをふまえて、社会システムの実質的な内容を明らかにした。その最重要な点は、従来の社会学理論が行為を起点とする行為理論として構成されていたのを、コミュニケーションからなるシステム理論として、ルーマンが基礎概念を変更したことにある。そうせざるをえなかったのは、社会の生成、変化を一つの理論によって説明するためである。行為理論ではなく、社会システム理論によって、社会が解明されなければならないというルーマンの主張がこの行為からコミュニケーションへという基礎概念の変更によって、明確になっている。これについては、①社会の構成要素、②行為からコミュニケーションへ、③コミュニケーション——情報、伝達、理解の総合、④コミュニケーションの行為への縮減というながれで、ルーマン独自のコミュニケーション概念、およびコミュニケーションと行為の関係の解明をとおして明示した。

社会の変動を問題にするさいにその基底にあるのが、ダブル・コティンジェンシーである。すな

わち、他我は自我の予想とは異なった行為をすることが可能であり、それは自我他我双方にあてはまる。つまり、ダブル・コンティンジェンシー問題は、行為の可能性の不可欠の前提条件であり、かつ社会的な事態にはならず潜在的に付随するものであり、これが、①端緒としてのダブル・コンティンジェンシー問題、である。この問題の解決をめぐる、ルーマンとパーソンズの相違が出てくる。ルーマンは、パーソンズとは違って、時間次元を入れたダブル・コンティンジェンシーの解決方法を考えている。ルーマンは、このダブル・コンティンジェンシーを基礎にして、社会秩序の生成メカニズムを解明しようとしているのだが、それらは、順を追って、②社会システム——二つのブラック・ボックス、③社会秩序の形成——ダブル・コンティンジェンシーの自触媒作用、④ダブル・コンティンジェンシーと二つの自己準拠、⑤ダブル・コンティンジェンシーの問題性という項目を設定して説明した。

第三節では、社会システムにおける「構造」概念に関して、①ポスト構造主義という位置づけをめぐる、②構造と過程——システムの二つの形式、③期待の期待——期待の再帰性、④パターン、役割、プログラム、価値、⑤行動期待の一般化という視角から、社会システムにおける構造の位置、すなわち構造概念を理論上優先させないという位置づけの意義を、システムの構造の機能の分析を通じて究明した。

最後の第四節では、「社会の把握——自己描写としての機能分化した社会」をテーマとして、社会というシステムと相互作用との差異を軸にした、ルーマン現代社会論を分析した。その具体的展開は、①社会というシステム——二つの社会システムの区別、②社会と相互作用の差異とその特徴、③機能分化——文化とコミュニケーション・メディア、④サブ・システムのオートポイエシスであり、機能分化した現代社会の再生産のメカニズムが、コードにもとづいたコミュニケーションであることが解明されている。だが、相互浸透、構造カップリング等の概念を用いてのサブシステム間の関係記述については、さらなる理論的な精緻化が必要であることもあわせて指摘した。

最終章の第6章では、「ルーマン理論の可能性」ということで、まず第一節では、ルーマン理論のオリエンテーションの有効性として、差異を基軸にしたシステム理論のオリエンテーションの意義を吟味している。差異にもとづく研究の利点は、調和的な過度な人間主義との決別であり、人間の差異性と同一性のバランスのとれた理論の構成に通じている。そうしたオリエンテーションによってはじめて、じつのところ従来言われてきた人間の主体性を組み上げうる理論構想になっている所以を明示した。

つづく第2節では、「社会学に対する理論的貢献——基礎概念の精緻化とその関係づけ」と題し、第1に、従来の用語を首尾一貫して相互に関係づけたこと、さらにコンティンジェンシー、自己準拠、オートポイエシスなどの新しい用語を導入して、社会理論をより複合的にしていること、第2に、自己準拠概念の社会学への導入の意義、そして第3に、意味に関する考察のもたらすもの、という三つの観点からルーマン理論の意義を論じた。第3節「残された課題」では、モノグラフの研究の必要性を指摘した。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、ニクラス・ルーマン (N.Luhmann, 1927-) の社会システム理論の全貌を着実に究明することを企図したものである。

本論文は全六章から構成されており、「第一章 社会学におけるルーマン理論」では、ルーマンの基本的な理論枠組を概観し、自己準拠 (Selbst-referenz) を対象の側にも認め、そのことを理論構成の要とするところにルーマン社会システム理論の斬新さが存していることが、あますところなく指摘されている。

「第二章 システムとはなにか」では、複合性の縮減を基軸とするルーマンのシステム概念が、生物学者マツラーナとバレラのオートポイエシス概念との関連において、手堅く論じられている。とくに、システムの「閉鎖性」が「開放性」の前提条件であるとするルーマンの所説が丹念に解明されている。

「第三章 自己準拠」では、ルーマン理論の課題が、普遍性を要求する理論の構築にあることが明らかにされている。意識の自己準拠のみを重視する立場においては、観察の自己準拠に優位性が与えられているのに対して、対象の自己準拠をも射程にいたした理論を構成することが、ルーマン社会システム理論の一つの中核的課題であることが解明されている。

「第4章 方法としての機能主義」においては、ルーマンの等価機能主義の方法的意義が簡明的に論じられている。従来の因果性把握では、単一原因と単一結果が結びつけられ、素朴な存在論にとらわれがちなのに対して、ルーマンの機能主義は、ものごとのコンティンジェンシーに焦点を合わせた索出的方法であり、多種多様なことがらを比較考量する方法であることが明快に指摘されている。あわせて、ものごとを、いかにして存続するのかという側面からのみ捉えるのではなく「問題」として捉えることが、ルーマンの機能主義の基本的な構図であることが解明されている。ルーマンの機能的方法の意義は、(1)潜在性の顕在化、ならびに(2)顕在的な構造や機能を別様の可能性も光のもとで観察すること、という2点に存在していることが明らかにされた。

「第5章 社会システム理論——行為理論を超えて」では、(1)社会学理論の基礎概念が、行為からコミュニケーションへと転換されなければならないゆえんが、まず明らかにされている。続いて(2)ダブル・コンティンジェンシーの問題が取り上げられ、それが社会の生成・変動の基盤であることが徹底的に究明されている。そのさい、時間の問題についてのルーマンの鋭い所説が詳細に検討されている。さらに(3)ルーマンのシステム理論における構造概念の位置づけが論じられ、構造主義をこえたところに、ルーマンの構造概念の特質があることが浮き彫りにされている。そのうえで(4)構造カップリングの概念を駆使してのサブ・システム間の関係に関するルーマンの言説は、されなる理論的精緻化が必要であることが指摘されている。

「第6章 ルーマンの理論の可能性」第一節「ルーマン理論のオリエンテーションの有効性」では、差異を基軸にするという特質を有しているルーマン理論が、旧来の人間主義から決別し、差異と同一性の差異に主眼をすえた理論構成を可能にしている点に、その有効性を有していることが論証されている。この理論構成によって、旧来の独我論的な主体理論が放棄されざるをえないゆえんがくまなく明らかにされている。第2節「社会学に対する理論的な貢献——基礎的諸概念の精緻化とその関係づけ」では、(1)数々の基礎概念、すなわち、コンティンジェンシー、自己準拠、オート

ポイエシスなどの概念を駆使して、社会学理論をより体系的・複合的にしようとするルーマンの企てが解明されるとともに、(2)社会学理論における自己準拠概念の積極的な意義が分析されている。さらに(3)意味に関するルーマンの根源的な考察が社会学理論において第一級の意義を有していることが明らかにされており、この3つの側面から、ルーマン理論の可能的意義が総括されている。なお、第3章「ルーマン理論の残された課題」では、サブ・システム間の関係に関する理論的精緻化がルーマン理論にとっての緊急の課題であることと合わせて、「抽象的であるがゆえに具体的なものに迫りうる」とするルーマン理論の実質的な展開のためには詳細なモノグラフ的研究が必要であることが指摘されている。

本論文による以上の研究は、社会システム理論の第一人者、ルーマンの理論プログラムの全体像をその方法論に焦点をあわせて明示することにほぼ成功している。とくに、本論文は、実体論の隘路を脱却して、「実体から関係へ」という最新の理論動向の先端をいくルーマン理論の現代的意義に関する野心的な研究である。ルーマンは、現代社会学においてパーソンズ以後断念されがちな一般理論の再構築に意欲を燃やしており、自然科学における一般システム理論の展開をふまえて、社会的なものに関する一般システム理論としての社会システム理論の構築を目指していることが、本論文によって明らかにされている。こうしたルーマンの企てを成功裡に解読しえた例はこれまでになく、その意味で本論文はルーマン研究における一つの画期をなすものであるといえる。本論文はルーマン理論に関する着実で的確な研究として高く評価され、現代社会学理論の発展に寄与するところ少なしとしない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。